

三虎御土讀本

三虎御土讀本

三尾郷土讀本

御村は小さい御國です。三尾は小さい日本です。小さい日本の本當の姿がわからないで、
どうして大きな日本の姿がわかりませう。

先づ御村の姿を見つめなさい、見なほしなさい。本書はのための鏡です、永遠の鏡で
す。

鏡に照らした御村、そこには美しい善いこともありませう。それはより美しく、より善
くせねばなりません。醜い悪いこともありませう。それは速に矯めなほさねばなりません
ぬ。そのために本書がいくらかでも皆様の御役に立ちますれば……と念じつゝ

昭和十一年仲秋
(一九三六年)

三尾 巖 にて

崎 山 勇 識

三尾郷土讀本

一、	わたしくたちの學び舎	(1)
二、	龍王神社	(2)
三、	逢母	(4)
四、	三穂の石室	(5)
五、	法善寺	(7)
六、	國のため世のため	(8)
七、	中世	(10)
八、	光明寺	(12)
九、	日御崎	(14)
一〇、	猪土手	(17)
一一、	徳本上人	(19)
一二、	私たちの村……(上)	(22)
一三、	私たちの村……(下)	(24)
一四、	三尾村漁業株式會社	(26)
一五、	近村名所舊跡巡り	(27)

一、わたしくたちの學び舎

明治大帝がおごそかに仰せ出されました。

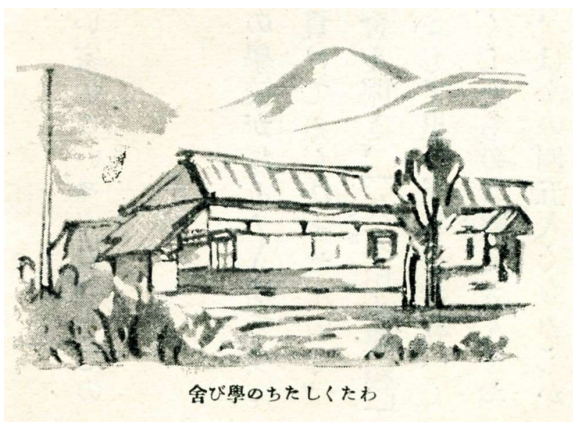
日本全國津々浦々どこの村へ行つても學問をしない家のないやうに、どこの家へ行つても學問のしない人のないやうに。

と、それは、明治五年のことであました。

かう仰せ出された大御心を畏み小學・中學・大學などの學校がだんく／＼建てられるやうになりました。わたくしたちの村でも、よそに負けてゐられませんので、明治九年七月二十三日に龍王神社の長床を借りて學び舎を開き、「久米山小學校」名づけられました。そして神主平井壽磨さんが先生として里の子を教へくさいました。その里の子等といふのは、つまりわたくしたちのお祖父さんとお父さんたちで、その頃はお祖母さんやお母さんたちは、ほんの四五人ぐらゐしか顔を見せませんでした。

それでも年とともに兒童が増して來ましたので、今の役場の近くで民家を借受けて移り、明治十五年には新に校舎を建て、全十九年には「三尾村尋常小學校」と名をかへられました。これより先明治十七年には學校の成績がすぐれてよろしいとて文部省から大勳な御褒美を戴きました。その後明治三十八年にはじめて高等科を置いて「三尾尋常高等小學校」とよばれ明治四十二年には校舎を改築せられましたが、その後だん／＼兒童數が増して來ましたので、大正十二年に見晴らしのよい、ゆつたりとした今の土地に立派な校舎が建てられたのであります。

昭和十一年には學校衛生に關する施設が飛びぬけてよろしいとて再び文部省から選奨される光榮を擔ひました。

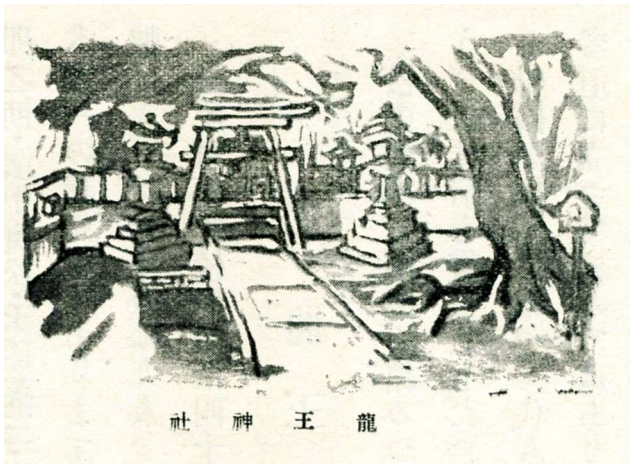


わたしくたちの學び舎

創立以らゐ校長となられた先生は平井壽麿・水谷竹之助・假谷虎楠・川角清次郎・米谷卯之助・濱中寅松・千原英三・宮下巖^{いはほ}・庄司良三郎・龜井龜之助・山本啓藏・大江新助・鈴木友一の諸先生であります。只今校地は一三二〇坪・建物は一八七・三二坪・學級數は八つ、先生方は九人、児童は三二七人となつてゐます。

三尾青年學校は明治四十一年に創立、先生方は八人、生徒は六一人あります。

二、龍王神社



松の太木に榕樹の絡^{から}みついた景觀！まあ何といふ珍しくすばらしい眺めでせう。松は宿を貸しました。榕樹は宿を借りました。それなのに榕樹はいつのまにか母樹を倒して取つて代らうとしてゐます。それが私たちの氏神さま龍王神社の參道に立つてゐるではありませんか。よその人がりをんさんと申上げる村^ハ龍王神^ハは小三尾の海岸龍王崎の森々と繁つた林の中に鎮りまし、畏くも大前にはわが國でも稀だといふので縣の天然記念物となつてゐる大榕樹が柏槇の老樹を圍んで森のやうに繁つてゐます。この柏槇もまた廂をかして母屋をとれた形で、かはいさうなものです。が南側の日当たりのよい崖には多くの自生柏槇が勢よく生ひ立つてゐます。

この御^ハは御本殿に豐玉彦神・猿田彦神の二柱を御祀りし、その左側に大己貴神^ハ、右側に惠美須神^ハがあります。また境内の八幡神^ハは逢母八幡さまとして有名なお宮様を明治の末頃にここへ御遷し申上げたのであります。御本殿奉祀の猿田彦神はその頃日御崎に鎮座の御神^ハから合祀したもので、そ

の御崎神^{ミサキ}は、大永の頃に和田浦の御崎神^{ミサキ}(今の郷^{サト}から日御崎へ勧請したのでした。

さて當^{タテマツル}の主祭神豊玉彦神は海の上を守り、漁業を守つて下さる神様として昔から尊崇され、また水に縁故ある神様として旱天には雨請の百姓たちが熱禱を捧げる例になつてゐますが、いつ頃ここへ御祀り申上げたかはわかりません。今残つてゐる棟札のうち元和三年^{一六二七年}(紀元一二七七年)の分が一番古く、その年その年改築されたことはわかつてゐますが、それより前のことは一向わかりません。元和の棟札には「紀州海郡三尾莊龍王宮造宮棟上、本願唐子中栖源兵衛、三尾村西理右衛門、本願比井内川孫左衛門、三尾村中村孫右衛門、神子彌市女、神主孫市郎、大工湯羅藤原嘉三郎、天田藤原三郎兵衛」等の文字が見えてゐます。面白いのは海郡とあることであま郡と讀むのですが、その頃勝手にあま郡といつてゐたのか、本當に海郡郡に屬してゐたのか、はつきりしません。今の由良衣奈白崎あたりまでは海部郡の領域の及んでゐたことはありますがこの邊まで海部郡だつたかどうかは、どうもはつきりしません。それから唐子中栖源兵衛はもと湯川家に屬した豪族^{ゴウゾク}でその頃は醫師をしてゐました。比井の内川氏、三尾の西氏中村氏共にその頃の勢力家でした。そして神主として孫市郎といふ人が奉仕してゐましたが慶安三年^{一六五〇年}(紀元一二三〇年)の分になると、同じく紀州海郡とあり、「願主和田村五郎太夫本願三尾浦玄哲、西理兵衛、大工藤原吉左衛門、小工三郎兵衛」などとあり、こんどは和田の五郎太夫といふ人が願主になつてゐる所を見ますと、あの頃には當^{タテマツル}を崇敬する人が比井方面にもあり、和田方面にもあつたことがわかります。そして玄哲といふのは法善寺の初代住職で、同寺の山號を龍谷山といつてゐる所から考へると、その頃は神佛混淆で、法善寺^{ほふぜんじ}が龍王神^{ミサキ}の宮寺で、玄哲はいはゆる^{ミサキ}僧となつて^{ミサキ}務に關與してゐればこそ棟札にまで其の名を記入したもので、この棟札も多分玄哲が書いたものでせう。更に想像を加へると、この玄哲は海部郡のどこかの出身で、この邊をも海部郡と思ひ込んでゐたのかも知れません。その後寶永七年^{一七二〇年}(紀元一二三〇頃)山下氏の^{ミサキ}先八郎左衛門といふ人が神主になり代々世襲して明治初年^{一八六八年}の山下仙太郎といふ人に及び罷めました。その後任は比井王子神社の平井壽磨といふ人が兼務し、同二十年今の奥山靜雄氏就職、勤續今日に及んでをられます。

御祭典は大陰暦十一月初申酉の日で和田御崎神社と同日であつたが太陽暦となり十月十七日となりました。祭式は往古より神前式のみであります。

龍王崎には高さ五間幅二間奥行一間半ほどの賤が窟といふ洞窟があり、村人はカンカラ礁と呼んでゐます。

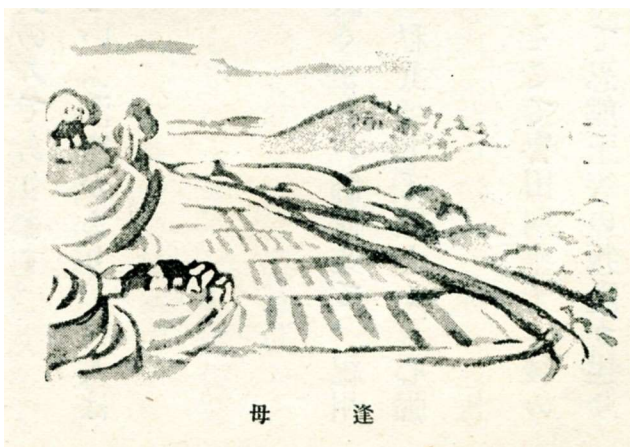
三、逢 母

神功皇后の新羅征伐。それは國史に輝く雄々しくも涙ぐましい御偉業で、紀州出身の武内宿禰が御伴を^{とも}申上げて大功を立てたことは、私共として嬉しくも心強い次第であります。

皇后には御目的を達したまうて九州へ御凱旋になり、そこで譽田別皇子（後の應神天皇）を御生み遊ばされましたが、たまく都の方で忍熊王等の叛亂が起りましたので、武内をして新皇子を懷いて四國沖から紀州に向はしめ、御躬らは軍を率ゐて瀬戸内海から御東征なさいました。

やがて武内は皇子を奉じてわが日高の大引浦^{おほびき}に上陸し、衣奈の行宮に御案内申上げました。さうしてゐるうちに、皇后は忍熊王の勢が強いので一先づ武内の郷國紀伊に御下りになつて更に御軍備をなさうと今の大阪あたりから御船で隣村阿尾へ御着になり鉾突崎^{ほこつき}に御上陸の上、わが三尾へ御出になつたのであります。それと承つた武内は衣奈から皇子を懷いてこちらへ参り、今の逢母^{おひぼ}の邊で御母宮と皇子が御對面になつたと傳へられてゐます。

さういふ畏いおゆかりのあるわが三尾の里では御聖蹟を慕ひまゐらせて後に逢母八幡神^母として



母 逢

御祀り申上げました。この御^ミは今の役場のところに鎮座してゐましたが明治になつて龍王神^ミの境内へ御遷し申上げました。隣村産湯では御産湯を差上げたと申傳へ、産湯の七つ井戸といふのがあつたさうですが、今はその中の一つだけが古い榕樹のかげに残つてゐます。そしてそこにも東山手に産湯八幡神^ミと申す立派な御^ミがあります。

さて皇后には皇子と御會ひになつてから更に武内と軍の御評定がお出来になると共に比井に軍の浦から勇ましう御船出遊ばされ、武内の郷里を経て紀川筋の小竹宮^{しぬのみや}に入らせられました。それから間もなく右の叛亂は鎮ります。

四、三^み穂^ほの石^い室^{はや}

追思碑の辻から南に當る小高い丘を越えて崖づたひに後磯といふ荒磯に下り、奇岩怪石のころがつてゐる中を少しく行きますと、俗^{ぞく}に久米窟といつてゐる大きな巖窟があります。奥行十五六間、幅四五間、高さ入口で五六間、内部で七八間乃至十二三間もあります。萬葉集に
はたすすき久^く米^めの若^わ子^こがいましける

三穂の石室いはやは見れどあかぬかも(巻三)

常磐なす石室は今もありけれど

住みける人ぞ常なかりける(全)

といふ博通法師の歌を載せ、また作者のわからない

かざはやの美保みほの浦廻うらみの白躑躅

見れどもさぶしなき人思へば

みつくし久米の若子がい觸りけむ

磯かやねの草根のかれまく惜しも

といふ歌も出てゐます。三穂・美保は即ち今の三尾で、この窟こそ常磐なす三穂の石室の跡だらうといふことは古くは紀伊名所圖繪めいしよづゑに考證され、近くは京都帝國大學の澤潟先生、和歌山縣女子師範學校の日比野先生も同じ御意見であります。紀州には他に三尾といふところがありませんし、またこんな大きな巖窟も見當りませんから三穂の石室は、やはり、これにちがひありません。

しかし久米の若子と申す御方については貴い御身分の御方だったらうと想像されるだけで何分今から千餘年の昔の事ですから、一向はつきりしません。はじめの歌に「いましける」といふ敬語を用ひてゐるところを見ますと貴顯の御方かとも想はれますが、第二の歌及第四の歌に「住みける」だの「い觸りけむ」だのとあるのを見ますと、さうで無ささうにも見え、とんとわかりません。ただ三穂の石室がこれだろうといふことだけは、古今の學者の意見の一致するところです。それにしてもこんな不便な片田舎に忍んで御出でになつたことは、どんなに御不自由・御窮屈でいらしたことでせう。



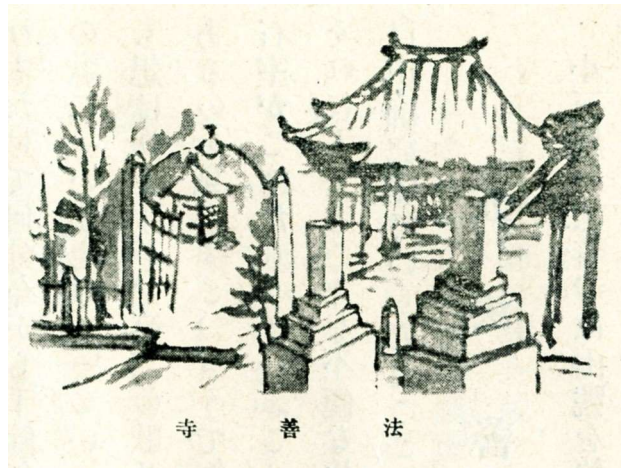
三穂の石室

五、法ほふ

善ぜん

寺じ

小三尾の法善寺ほふぜんじは山號を龍谷山といひ、佛教としての宗派は淨土宗ちんぜいは鎮西派で、京都知恩院の末寺



寺 善 法

になつてゐます。もとここに眞言宗の小さな庵があつて善阿彌といふ人が住つてゐたといひつたへてゐますが、いつの事かはつきりわかりません。先づ戰國時代の末頃と見て大したまちがひがありません。今も境内の隅の方に苔むした古い小さい五輪塔の残つてゐるのを見かけることがあります。あれが眞言宗時代の名残です。さうした小さな庵が淨土宗にかはつて今のやうな佛堂が建てられたのは江戸時代になつてからのことで、今から三百年ぐらゐさかのぼ遡れませう、玄哲といふ坊さんが改宗したのだそうです。それからずっと其の法系をつたへ今の住職岡本鳳堂師は第十九代目に當られます。

今の本堂や庫裏は文化の末頃から文政の初め頃へかけて第十二代愍成和尚の時に改築せられたもので、その頃檀中の人たちは多く關東の九十九里濱方面へ出漁して盛に活動してゐましたので其の篤志の喜捨によつて、あの頃としては意外に立派な普請が出来ました。私共の畠先はこんな風に鎖國の世にあつても郷里で小さくなつてゐるやうなことをせず、奮つて海洋上に乗出し遠く東國の水産界に雄飛しました。而も他郷にあつても故郷を忘れず、氏神を忘れず、畠先の御墓のある寺を忘れず、事あるごとに誠心を捧げ勞力を捧げ費用を捧げたのであります。

このお寺の御本尊は、いふまでもなく阿彌陀如來で、別に聖徳太子の御刻みになつたと傳へられてゐる御丈五尺の藥師如來木像が安置されてゐます。

境内の廣さは凡そ三百五十坪、檀家は百三十餘戸あります。

六、國のため世のため人のため

私たちが毎日々々誠心をこめて一生懸命にめいゝの務めを勵むことは一身一家を支へると共に國の他世のため人のためにもなるのでありますが、それにしても、かうして安らかに暮すとの出来るのは誰の御蔭であるかといふことを考へて、進んで國のため世のため人のために身分相應に働かうといふ覺悟がなければなりません。そして一旦緩急のある場合には勿論身命を捧げて御奉公申上げることは日本國民としての榮^{はえ}ある務^{つとめ}であります。

私たちの先輩は或は郷里にあつて、或は他郷にあつて、或は外国にあつて、みな眞面目に熱心に活動してをられますとともに明治以來の國難に當つては御^{おめし}徴によつて國防の第一線に立ち砲烟彈雨の中を馳驅してめざましく奮戦せられた方も大勢あります。その中には名譽の戦死を遂げて光榮ある護國の鬼となられた方もあり、また錦を飾つてめでたく凱旋された方もあり、私たちの心から畏敬し感謝する所であります。今それらの方々の數を挙げますと

	出征者	戦病死者
西南役	一	一
日清戦争	一一	一
北清事變	四	〇
日露戦争	一九	〇
清國革命事變	〇	〇
日獨戦争	一	一

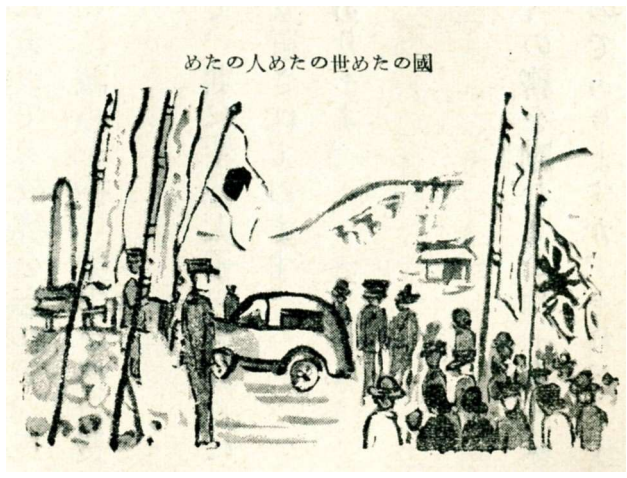
満洲事變	三	〇
計	三九	三

となります。そして戦病死者は悉く別格官幣^三靖國神社^三に合祀さるるの榮與に預り、畏くも御歴代天皇陛下の御親詣を忝うしてをるのであります。村でも亦忠魂碑を建てて年々嚴に御祭をいたします。

それから私たちの先輩は地方公共のためにも事ある毎に或は勞力を捧げ或は資財^{しさい}を寄せて公益を廣め世務を開くこと及び博愛衆に及すことに熱心であられます。それでこの村の學校も^三寺もその他の團體も大層立派になり、道路・橋梁その他の施設もだんく改善されてまゐりました。その中でも石碑に建てられて永久に傳へられてゐる事蹟を調べてみますと次の通りであります。

年代順に申しまして、先づ小山甚藏翁であります。翁は舊藩時代に庄屋を勤め、明治の初には戸長を勤められましたが兼ねて農商の業を營み、公共の事にいろく骨を折られました。特に後の世のため水源を養うて置きたいといふ深い考から明治八年^(一八七五年)に澤山のお金を出して大山谷池の堤を増築^{ぞうちく}されました。それで水がよけいに溜るやうになり、今まで灌漑に困つていた逢母の山田は旱害から完全に免れたばかりか新に拓地墾田が進み、お米が澤山とれるやうになりました。御蔭で村民は永くその恩恵に浴するわけでありまして明治三十八年^(一九〇五年)、時の村長稻葉直十郎さんを始め七十人の人々が協力^{けふりよく}して追思碑^{つしひ}を小三尾の沿道に建てました。

次に工野儀平翁^(一八八七年)でありますが、翁は明治二十年、三十四歳のとき、たつた一人で晚香坡に渡り頻



りに郷里の人々を招いていろ／＼親切に面倒を見てくれたのであります。本當に義侠的な立派な方であります。かうして翁は在米二十五年に及びましたが、自身は大に富を得るといふ所までは行きませんでした。しかし三尾から行つた人たちで翁のお蔭で成功した人は數知れぬほど大勢ありま
す。今や當村民の半ば以上は彼地で働いてゐて、我が郷がだん／＼豊かな村になり安樂にくらして行くことの出来るのは全く草分けとしての翁の賜であります。

萬谷徳松氏は幼にして大阪御堂筋の履物商の丁稚奉公を勤め後自分で履物商を營み刻苦勉勵し巨萬の富をつくり大に成功した方で、明治三十五年（一九〇二年）に金壹千圓を投じて本村大三尾、小三尾の堺に當る橋の川に龍王橋を架設して一般交通の利便を圖りました。

萬谷徳松氏の妹に當る高橋ワキさんは大阪高橋製帽株式會社社長高橋富三郎氏に嫁し賢婦の聞え高く其夫高橋富三郎氏は。巨費を以て明治四十二年（一九〇九年）三尾比井街道城峠の切下道路を改修して一般交通の便を圖つたのはよく人の知つて居るところで現在、村の忠魂碑の傍に記念碑があつて同氏の徳を永久に稱へてゐます。

七、中 出

磨き立てた盆石そつくりの大岩礁中出、「本當によく出来てゐなあ」と誰もがいふ。繪筆も及ばず、手工でもなか／＼………文筆では勿論………朝あしたにあれを望み、夕ゆうべにあれを眺めては、浦人は礁上にお祀りしてゐる辨財天べんさいてんさまを遙拜します。浦の守りの島であるが故に昔の人が辨財天べんさいてんさまを齋き祀つたのでせう。幾百千とも數知れぬ鷗すなとがいつも群れ遊んでゐるので、天鳥あまどりの下る島といふ意味であまとり島ともいひ、古書には海人の漁りの島といふ意味で蜚取島と充て日本水路誌（海軍でこしらへた本）にもさう書ひてゐます。

島は大三尾海岸から約三町の浦口にあつて露出した四つの岩礁から成り立ち、周圍が三町餘あり、

その一番大きな礁の絶頂は高さ二十四米あります。いはゆる三尾の海人の作業の本據となつてゐて、旅行家北尾さんの近畿景觀といふ本の中にも

三尾の濱邊に出て蟹取島の見えるところまで来ると一隻の漁船がしきりに網をあげてゐるのが見えた。傍を通る柴刈の少年に聞くと、えびをとつてゐるのだと答へた。

私は岩角に腰をおろしてプリズムを眼にあてた。そしてその邊の海面に浮き沈みする不思議なものを見た。四邊はもうすっかり黄昏れてゐるのに、人とすれば何をしてゐるのだらう。

あれは何にかと少年に聞くと、

……：テングサ採つてゐるのだと、

答へた。

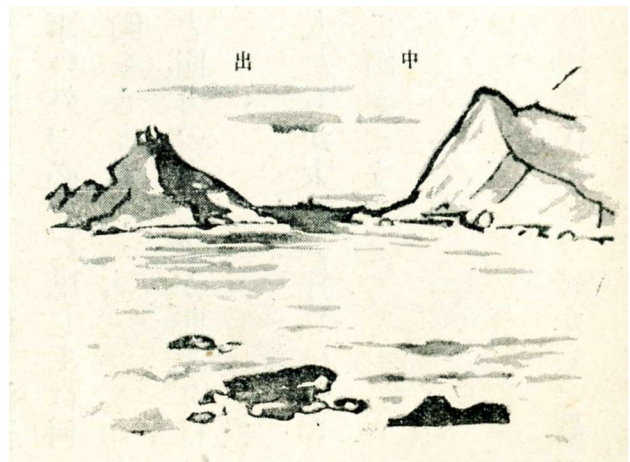
蟹取島の海洋に向つた南側は鳥の糞で一面に白くなつてゐる。冬になると鵜が来と見える。

その岩の前で不思議な女の裸體が魚のやうに浮いたり沈んだりした。

とあり、西清右衛門翁の覺書に「南紀三尾海士は御國主より御免狀頂戴仕、本朝最初の者に御座候」ともあります。二人三人と組になつて海に潜りこみ鮑や海藻などを穫るものですが、三尾の海人は昔から名高く漁事の外、必要に應じては何の探海作業にも十尋も二十尋も深く潜つてめざましい働きをします。

この島はまた磯釣の名所にもなつてゐて晴れた日など四方の太公望が押渡り日ねもす綸を垂れて浮子と睨つくらをします。

辨財天さまのお祭は七月の十七日で、この日は村の人たちが太鼓を打ちながら舟で島に渡り、日頃の深い御恩を拜謝して恭しく大前に額きます。



八、光明寺

わが紀州へ浄土眞宗の教が擴まるやうになつたのは戰國時代のあの騒がしい最中、本願寺第八世蓮如上人が説教に御出になつてからのことだといはれてをります。上人が紀州に御出になると、いつも名草郡の永穂權守といふ豪族のうちへ立寄られました。權守は上人の直弟子のうちでも一ばんとしつかりした人物でした。

その權守とは大層親しい友だちに三輪正寛といふ士がありました。

その畠先は大和の人でしたが正寛は播磨の姫路で育ち、大きくなつてからは立派な士になりました。後にわけがあつて浪人となり、紀州牟婁郡鉛山で採鑛業を營むことになりましたが、往復の途すがらいつも權守の家に立寄つては、眞宗の話や蓮如上人の御噂を聞きました。それでその勧めによつて遂に鉛山の自家を寺とし、長子（道願）を僧としました。

道願あるとき京に上るとて權守の家に泊つたところ、三尾浦からここに奉公に来てゐるものがあり「私の郷里三尾でもだんく蓮如上人の御導きによつて眞宗に歸依するものが多くなりましたからどうぞ三尾へ御出になつてお寺を御開き下さいませ」と頼みました。「さうか、それでは家へ歸つて父ともよく相談してみよう」といつて別れましたが、まもなく三尾の門徒の人たちが打連れて鉛山まで頼みにまゐりました。

あまりの熱心さに道願も今は辭するに由なく、遂に鉛山の寺や田畑などを捨てて三尾に移り、眞宗の庵を開きました。それが永禄六年（一五六三年）桶狭間役から三年後（一五八六年）のことで、實に海南山・清淨院・光明寺のおこりであります。ところが次の代（住持道淨）天正十四年に火事に遭うて全焼し、移轉再建しましたが



寺 明 光

享保九年(一七二四年)に至り、(住持權律師圓了)更に今のところへ移轉改築しました。(舊位置は、はつきりわかりませんが、今、坊ぼうの谷たにといふところにあつたやうです)この時關東方面へ出稼してゐた村の人たちは燃ゆるが如き愛郷崇あきの誠心と佛恩報謝の一念から奮つてその資金を捧げ立派な本堂が出来ましたが時移ると共にだんく朽廢しましたので大正七年(一九一八年)から改築の計畫を進め、昭和四年(一九二九年)三月起工、翌五年七月現在の本堂が見事に完成しました。この度はアメリカへ行つてゐる人たちもあき志をついで澤山の淨財を喜捨しましたので、工事は善ぜんをつくし美をつくすことが出来たのであります。現在の境内けいだいは約三百坪檀家だんかは約二百三十戸です。

住職は初世道願から三輪家代々相承けて今の了聽師は第十四世に當られます。その歴代のうち第十世圓達は窓臥と號し和歌を好んで大阪の歌人尾崎雅嘉の門に入り、精進すること多年随分すぐれた詠をのこしてをられます。わが日高地方では實に最初の歌人でした。

西行法師いはく、和歌はこれ禪ぜん定ぢやうの修行しゆぎやうなりと。げにも心を一所に制せずしては、かつてよまれぬ業なるべし。散亂の心を止る事、此みちにすぐへからすとふるきふみに書きのこしけるを思ひ出でて

わが心言葉の花にさきいでて

うき世の風にちりもみだれず

妙願寺(志賀)に詣でし時あつきのあまり井の水をむすびて

をのづから心も涼しこの寺の

あか井のみづを汲みやかはして

網 引

浪かぜもしづけき三尾の朝和に

あびきせんとやあこの呼ぶこゑ

母の形見に残る鏡を見てよめる
折をり々に見てはなげきのますかがみ

かげたえはてし人をしたひて
糸 櫻

くりかへし又もきて見む絲さくら
ふきなみだしそ春の山風

九、日 御 崎

あれ火が見える、

白 い 火 が。

くるくまはる、

白 い 火 が。

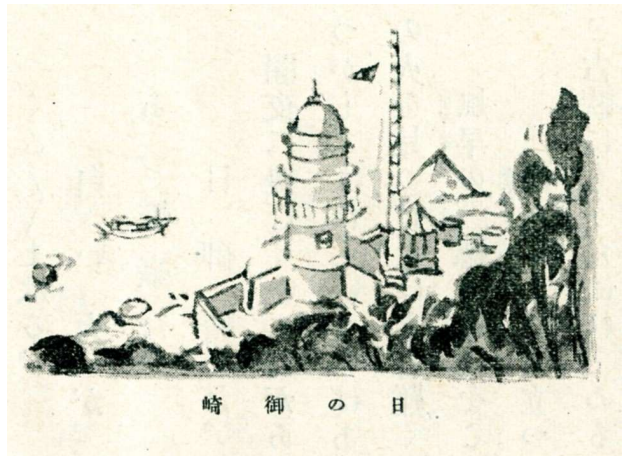
あつ燈臺だ、

日 御 崎 だ。

闇夜に提灯といふ諺がありますが、闇夜の航海者にとつては燈臺の火ほど、なつかしくうれしいものはありません。わけて難所といはれる海上にあつては燈臺の火を見つけたほど有難く頼もしいものはありません。

風早かさはやの三穂みほの浦廻うらみをこぐ舟の

船人ふねびととよむ浪立つらしも



と古歌にもたはれてゐるやうに、わが日御崎沖は熊野の潮岬と並び稱せられる有名な難所です。それに御崎は外洋に向つて遠く突き出てゐて紀伊水道と紀州灘の限界になつてゐますので國防上からいつでも大切なところ です。

この學校から御崎へは、人家の間を縫うて先づ濱に出で、眞砂路まさおじをしばらく參りますと、やがて山にかかります。今はハイキングコースになつてゐるので路するべも出來てゐますが、以前はめつたに行く人もなく、はじめての人はよく道に迷つたものでした。そこで文字通りの急阪を攀じ登りますと見はらしのよい崖がけづたひの路に出ます。雜木林ざふきばやしといふより草山といった方がよいと思はれる南受の山腹なので冬でもハイカーの額に汗がにじむほど、ぽか／＼と暖い日がつづきます。しかし一朝海が荒れて白浪が立つて來ますと強い／＼風がぴゅう／＼と吹きます。それがまた御崎の端へ行くほど強く、風早の三穂と

呼ばれるやうになつたわけです。

日の御崎船すぎゆかばいささかの
眞風まふもあらぶる紀伊の海原（中村憲吉）

近世にあつては、紀州藩からここに狼烟臺ろうえんだい及び遠見番所ゑんけんばんしよを置かれ、番所ではいつも番人が詰め切つて沖を行きかふ船舶を見張つてゐました。そして怪しい船と見たら飛脚を以て和歌山へ注進しました。狼烟は不意の出來事を次の村へ傳へたり、近くの地土を召集する場合に用ひる合圖で、肥松を焚くのですが、その煙がよく上るやうにとて山路地方から狼の糞を取寄せて交ぜて焚くことになつてゐました。近頃の調べによると狼といふものは日本内地にはない、番所から飛脚が駆出したことは、時

としてないことはかつたが狼烟を實際に上げたことは殆どなかつたやうです。これらの番所や狼烟

臺の跡は、明治になつて燈臺や望樓を建てるときに地均し工事をしたので、わからなくなりました。

海軍望樓は燈臺の背後の山上に、明治二十七年創立大正十年廃止となり、今は朽ちはてた建物だけが残つてゐます。

日御崎燈臺は明治二十八年一月即ち日清戰役の最中に出來上りました。その位置は正しくいふと北緯三十三度五十三分・東經百三十五度三分三十秒の地點にあつて、水面からの高さ七十九米、基礎からの高さ十一米、鐵骨造、圓形白塗で、三十五萬燭光、回轉白色の電燈は三十秒毎に一閃光を放ち、その光達距離は四十二軒六となつてゐます。

遠方の廻轉燈が動きつゝ、

大きく向け來るその光はや

わが船に御崎の崖のそばだちの

あまり近づけたいや高く見ゆ（川田順）

と見れば山の端にぼつねんと立つてゐる寂しそうな燈臺でありますが構内に入つて見ますと、美しい芝生をめぐらして塵一つ留めぬすがくしき、靜ではあるがそれでゐて明るらかで、各階各室隅から隅まで掃除が行届いて、わたくしたちのきたない足で上るのが恐れ多いくらいです。かうした中にあつても見張所に勤める方は四六時中休む暇もない忙しさで望遠鏡にしがみついて近海の疆界に目を配つてゐます。

沖を通る船は必ず燈臺に向つて敬意を表する信號を掲げます。するとこちらから見張所の檣頭高くするくしきと信號を掲げる例になつてゐます。

旅行家北尾さんの言はれたやうに本當に燈臺こそは暗夜に於ける船の羅針であるばかりでなく海を眺める大きな陸の眼でもあります。

日御崎秋の日和を來てみれば旗あげつつも大船わたる

日御崎いつ來て見てもあかぬかな海の姿も山のけしきも

あざやかに伊島ははれて浮かぶかな紀の海遠く秋の午後をば（田端憲之助）

崎の北二町ばかりにある岩を大倉^{ばえ}と云ひ高さ二十米。比井崎村阿尾に屬し、日高郡の極西であります。また崎の南には屈^{かがみ}岩（或は鏡岩とも書きます）があり、高さ二十九米、人の拜屈^{かつこう}する恰好^{かつこう}をしてゐます。或は朝日の光が此の岩に映じて鏡のやうであるから鏡岩といふのだとも傳へられてゐます。鏡岩の前面には烏帽子岩といふのがあり高さ二米、周四米ぐらゐで、昔から御崎明神が此の岩の上で御遊びになるから觸れると神罰を蒙ると傳へられてゐます。また鏡岩から東方三町ばかりのところ^{ところ}に徳本上人の念佛窟といふ洞窟があります。

一〇、猪 土 手

日御崎の北、比井崎村阿尾の海岸から三尾・和田の村界論争山あたりへかけて、山を越え谷をわたり幅・高さ各々四尺ぐらゐに傾斜面を切り、或所では溝になつて水の流れ落ちるのに便利なやうにしたかと思はれ、或所ではこちらの谷からあちらの谷へ連續^{れんぞく}し、蜿蜒^{えんえん}としてつらなること五十餘町に及ぶ大土木工事があります。土地ではこれを猪土手^{しんどて}と呼び、猪鹿^{ちようく}の害を防ぐためにつくられたものらしいといつてゐます。勿論谷の底では切れてゐますが、細かに調べてみると凡そ四つの猪土手が連絡を保つてゐることがわかります。

先ず西の方から順に擧げると第一に阿尾の猪土手といつてゐるもの、これは阿尾の小代^{こしろ}海岸から登つて火葬場の入口を過ぎ、大多寶塔山（おほたこどやまといつてゐます）の頂上に近いところをめぐつて全大字の清水谷に下るもので、長さ拾餘町に及んでゐます。次に三尾坂^{三尾では産湯阪}といつてゐます。

手といふもの、これは阿尾の小代^{こしろ}・城山附近の密林から登り、いはゆる三尾阪峠を経て三尾村白谷池に下ります。次には大形山^{おほかた}の猪土手といふもの、これは三尾坂の猪土手に連絡して白谷池對岸から登り、大三尾の背後に聳ゆる大形山（二六四米）の頂上に近い所を切り割つて坊の谷に下ります。その白谷から登るところは草山であつて土手が露出してゐますから遠方からでも望見することが出

來ます。棒の谷側は雜木に遮られて見えませんが、この校庭から仰ぎ見る一本松、あれの傍を通つてゐます。第四はこの學校の奥すなはち大山谷奥から海拔凡そ二百米のところを越えて磯邊の奥すなはち論争附近に下るもので、大山谷側は大形山から指呼することが出来るが磯邊側は密林にかくれて、どこからも見えません。これを大山谷の猪土手といひます。

さてこんなものを、いつの時代に、何の目的で、誰が、どうしてつくつたものでせうか。もとより工作といつても簡單なもので、ただ山の傾斜面を平均四尺の高さ

深さといつても
差支えありません

に切つただけ

で、自然石は多少利用された痕がありますが、石材は殆ど用ひてゐません。が面白いのは第二と第三とが完全に聯絡し、第一と第二、第三と第四も何れも相呼應してゐるやうに思はれ、四ヶ所相互に聯絡してゐるやうに見られる點であります。里傳によりますと、猪鹿の害を防ぐために拵へたのだらうとのことです。その構成から見て、こんなものがどうして防備のやくにたちませうか。またその規模から見て、こんな大袈裟なものがどうして必要がありませう。江戸時代の初頃までは阿尾に八町歩、三尾に三十町そこくの耕地があつたに過ぎないのに、猪鹿防備にどうしてこんなものがいりませう。

然らば或人たちのいふチヤシ即ちアイヌの城塞だつたといふ説、これまた容易に首肯出来ません。城塞といふからには外敵を防禦するに足る設備をしなければなりません。が猪土手にはどこにもそのやうな形跡が認められません。のみならずチヤシだとすると、もつとく規模の小さい、それでゐてもつとこみ入つた施設………少なくとも壘とか濠とかいふやうなものがなければならず、またチヤシに相伴ふところの堅穴とか貝塚とかいふやうなものも少しはある筈ですが、この邊にはそんなものは一切見當たりません。何にしてもかう無造作な簡単な工作で、しかも開放的であつてみま

すとチヤシなどとは思はれません。

猪土手でもなく、チヤシでもないとする、果して何でせうか。それは今のところ、どうも謎であります。假説としては何か神聖な行事（祭祀など）の遺跡ではなからうかと見る靈域説、牧場の遺

跡と見ると牧場説などありますが、それよりも面白いのは徳川初世（南龍公あたり）の狩獵場だつたらうと見る説であります。白崎村の海鹿島はあしかの禁獵區、神谷が猪の禁獵區であつたやうに、これも猪鹿か何かの大規模な禁獵區だつたらうといふのです。猪鹿の害を防ぐためには、こんなものは何の役にも立ちませんが、積極的に獵獲する場合には或程度まで猪鹿の遁走を妨げ目的達成の一助となり得たらうといふのです。この事に就いてはこれからの學者の深い研究に待たねばなりません。それにしてもこの謎の猪土手がわが郷にあるといふことは、面白いではありませんか。

一一、徳 本 上 人

何が恐しいといつても一心不亂・一生懸命の力ほど恐しいものはないといふことを、わが徳本上人は、その貴い行實に於て御示し下さつてゐます。

上人はわが日高が生んだ近世の有名な念佛行者で、ここから東北へ山一つ隔てた隣村志賀谷・久志の田伏家に呱呱の聲をあげ、俗名を十助と申されました。一體この西口地方から志賀谷へ懸けては昔から佛教が盛で、特に上人の御家は畠山氏の後裔として信仰の家といはれるほど熱心でありました。ここに徳本上人のやうな念佛行者があらはれたといふことは決して偶然ではありません。生まれながらにして念佛を稱へたといふ上人は、もとより竹馬や鬼ごとのやうな事を好まず、念佛を慕ふ手ぶり身ぶりは幼稚戯のうちにも見受けられました。家が貧しかつたために少年の頃から田井（松原村）の油屋へ奉公に参りましたが、一生懸命念佛を稱えつゝ仕事に精出しました。青年になつて家に歸りましたが山へ行つても田畑に出ても少しも念佛を忘れず、また大庄屋さんから戴いた父母狀を大切に孝養を怠らず、兄弟や隣人に對しても親切で、見ず知らずの巡禮の人たちにも夜業につくつた草鞋を贈つたり、番茶を供養したりしました。

十九歳のとき、お父さん名は三太夫が重い病氣にかかりましたので、我が命にかへても……念じなが

ら和歌山城下まで靈藥を求めに参りました。葉がきれると、やがてまた買ひに走りました。それには第一お金の調達に苦勞しながら早晩に久志の家を出て十七曲山じふしちまがりを越え、更に幾つもの嶮阪を越えて十餘里を駆足かけあしで往復し、夕方には歸つて来て、かひくしく看護するのです。かくすること一月に十幾度にも及びましたが、お父さんは遂になくなられました。

それから一人のお母さんに仕へ佛道修行に精進しましたが、二十七歳の時往わうじやう生寺

の湯川村
財部

大圓和尚だいえんをしやう小浦のを師として得度式とくどしきを擧げました。その翌年大瀧川丹生村月照寺に行つて住持大良和尚

とともに三十日間の別行をはじめたところ、和尚はやがて「もうかなはぬ」とて中止しましたが上人は立派にそれを果たしました。

この第一試練しれんに堪へて成功した上人は、二十九歳の早春、往生寺を辭して千津川せんづがは（矢田村）落合谷の草庵に入り、薄衣少食一心不亂の修行をはじめました。すなはち毎日夜半に起きて念佛を稱へながら水垢離みづおりをとること一日に七度、そしてその間は一心に禮拜らいはいをするのですがそれも五體投地といつて、佛教での最敬禮を、はじめは一日に三千禮らいから五千禮、後には七千禮から一万禮らいにも及んだといひます。それを三十四歳の時まで六年間つづけたので、身體も精神も全く生れ變つたやうな上人になられました。

そこで千津川を去つて萩原（東内原村）大河谷おこの庵に移り、これからは自分も修行しつつ大勢の人々を教へ導くことに骨を折られ三十六歳のときには塩津（海草郡）谷山の庵に、その翌年須谷すがい有田郡宮原村天神山の庵に移りました。師走しはすの寒空さむそらに頂の巖上から夜通し響いて來る鐘かねの音を聞くと、道行く人も覺えず襟を正したといひます。こゝに修行中の寛政八年（一七九六年）の秋、久しぶり（一七九四年）で故郷志賀に歸り、年よつた母君を慰められ、それから我が日御崎の窟

御崎の下、鏡岩から東へ三町餘のところにあつて、高さ一間半、幅二間、奥行き一間半ぐらゐ

に立籠り、二十一日間別時念佛を修められました。それより先寛政六年七月十二日の夜、海が荒れ

て御崎沖で難破船があり、乗組の人々が多く溺死したことがあります。それからいろいろ不思議なことも起つて來ましたので、その氣の毒な人々の亡靈を吊つてやりたいとて、斯くは窟籠りをされたので、その後この窟を誰いふとなく上人窟又は念佛窟と呼んで尊んでゐます。

上人はその後寛政十年（四十一歳）（二七九年）の頃高野から河内攝津方面を修行して廻られたが、どこへ行つてもお母さんのことを忘れず、毎朝故山の方に向つて禮拜を歛かさなかつたが、住吉の庵に居るときには、お母さんを志賀から迎へて、いろ／＼いたはりながら大阪京都あたりの靈地を巡拜させてあげました。

さうしてゐるうちに紀州の殿さまから郷國に歸つて大勢の人々を教化してほしいと仰せがありましたので、また須谷に歸つたところ殿さまから庵を建てて下さつたので、懇命辭みがたく、當分そこに留まることになりました。

四十四歳のとき、上人は宿願を果すために郷國紀伊を去つて全國修行の途に上りました。それからの足跡は近畿から東海東山北陸三道に及び、文政元年（六十一歳）（二八八年）で江戸小石川の一行院でなくなるまでの、どれだけ多くの人々を化導せられたかわからないほどであります。右の一行院は紀州の殿さまから建てて下さつたものですが、和歌山の無量光寺、志賀の淨安寺（誕生院）も上人がなくなつて後、殿さまからの仰せで建てられましたのであります。誕生院の下、記念碑の立つてゐるところが上人の誕生の地。その家はその頃のまゝ今長樂寺の前に移されてゐます。

上人御説教の一章

古人曰く、臨終は平生にあり、平生また臨終なりと。味ふべきぢや。いつもけふは大晦日であると思つて家業に精出すことぢや。さうしたら本當の大晦日には安心して年を送ることが出来る。一年の大晦日さへ常から用意したなかつたら狼狽（らうばい）することがあらうぞ。まして人間一生の大晦日の臨終に於てはなほさらのことぢや。うかくするな、平生の用心が何より大切ぢや。

一ねんは六六三百六十を南無阿彌陀仏の大晦日なり

一二、私たちの村(上)

日高郡には町や村が三十七ありますが、私たちの三尾村はその一つで、郡内で一番の西の端にあります。北は比井崎村産湯、東は和田村本ノ脇と山で界し、南はひろくとした紀州灘(太平洋)に臨み、西は比井崎村阿尾と山を界として隣合つてゐます。すなはち北東西の三方は二百米内外の山を負ひ、南は海に面して、東西に長く、南北に短く、北に高く南に低く、西部に少しばかりの平地がある外は大抵山または山を開いた畑や田であります。村の中央に大山谷川(端の川とも)いふ溪流があり、小三尾と大三尾とを界しますが長さ二軒にも足りません。

村の面積は四・九〇五方軒で郡全體(九五四・六〇五方軒)の百九十分の一、また一町村平均の二五・八〇〇方軒に比べても遙に狭く、郡内に於ける面積の順位は三十四番目で隣村和田村よりも狭く、當村より狭い町村といへば藤田・御坊・松原の三つだけで、これらの村は二十五も寄らねば一番の龍神(約一二四・方軒)にはかなひません。この面積を段別で表しますと、地目から見て

山林	三一三町七段	田	五〇町七段
畑	一〇町六反	宅地	二六六三九坪

なつてゐます。

戸口は昭和十年(一九三五年)の国勢調査によりますと、世帯數四百十五に對し、現住人口千四百八十二で、前者は郡全體の二萬一千二百に對し約五十分の一、一町村平均の五百七十三にも及びません。後者は郡全體の十萬六百五十に對し、六十七分の一、一町村平均の二千七百二十に對しては二分の一強に過ぎず、人口の順位では郡内で三十一



番目になつてゐます。世帯數に於て當村と略々相等しい矢田・東内原・志賀等には、それ／＼二千内外の現住人口を有するに比べて當村が一千五百も達しないといふことは、遠く海を越えてアメリカ大陸に活躍しつゝある人が多い結果に外ならず、いはゆるアメリカ村のアメリカ村たる所以のものが、ここにあるのであります。それで本籍人口といつて村役場の戸籍簿に載つてゐる人口は三千人からありますのに、其の約半數の千四百六十人があちらに入つてゐわけであります。そして郷里に残つてゐる人たちは多くは老人や女子供たちで、主として漁業及び農耕に従事してゐます。その漁獲物としては鰺・鯖・龍蝦・鮑・海蘿・荒布等で、就中鰺は昔から三尾うるめと稱して世に知られ「三尾のうるめに若野の卵、野口牛蒡に、和佐大根」と歌はれてゐるほどであります。

今私たちの村の生産額(一九三四年)(昭和九年度の分)を隣村と比較してみますと

	三尾村	比井崎村	和田村
總額	五三、四〇〇圓	二三二、五〇〇圓	一四六、二〇〇圓
農産	二六、〇〇〇	八一、七〇〇	一一八、八〇〇
水産	二四、四〇〇	一四五、二〇〇	二四、二〇〇
畜・林・鑛産は略			
十年度現住人口	一、四八〇人	二、四八〇人	一、八五〇人

となり隣村に比して、よほど劣つてゐますが、その代り海外に出稼して年々莫大なお金を送つて來ますから、それを勘定に入れたら却つて隣村よりも優勢かも知れませぬ。

が、わたくしたちの村としては、活路を海外に求めねばならぬほど土地が狭く耕地が少ないことは、なさないが事實です。即ち耕地總反別は六二町ぐらゐ、内米の作付に適する田は五十町歩内外、麥の栽培は七、八町歩しかありません。そこで米は豐作でも年に一千石内外、麥は百石内外しかとれず、農を業とする戸數は四十五六戸に過ぎないのです。養蠶の如き多い年で三十戸ぐらい飼

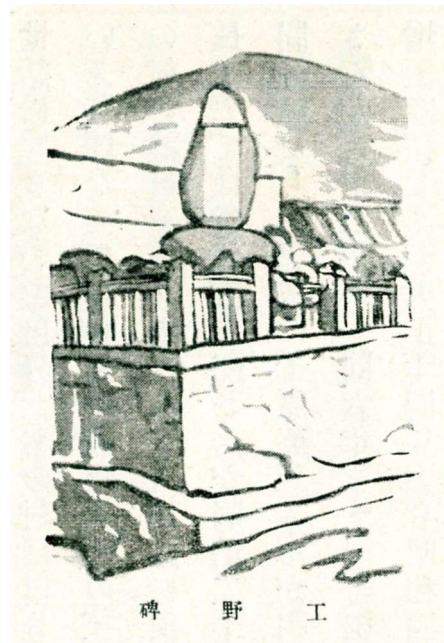
育しますが収繭は百數十貫といふところで、知れたものです。その他の副業とは殆ど言ふに足るものがありません。ですから海外に雄飛するといふことが絶対必要となつてまゐります。

氣候は温暖で、寒さ暑さもきびしくありません。夏の土用も凌ぎ易く、冬は大寒に入つても積雪を見ることは殆どありません。ただ四季を通じて風が強く、^{かせ}わけて冬は甚だしいことが特色であります。それを證明する數字を擧げてみますと、日御崎の全年平均氣温は一五・三度で上山路の一六・二度より低く、各月平均氣温の内八月の分を見ると、日御崎は二五・四度で、上山路の二七・五度より低く山間地方より涼しいことがわかります。また最低氣温を見ると、日御崎(二月)の五・六度に對し、上山路(二月)は五・五度を示してゐます。即ちこの邊は山間地方に比し寒暑の差が著しくない、人間の生活に適するといふことがわかります。しかし風の強いことは名物の一つになつてゐて全年平均風力が和歌山市の三・一米に比し日御崎では八米を示してゐます。日御崎で風の一番強いのは二月で一〇・九米、一月及十二月之に次いで共に一〇・五、一ばん弱いのは八月で四・八米、七月は四・九米となつてゐます。次に降雨量は年平均上山路では三千耗を超え、船津では二千四百耗、御坊では一千八百耗となり、日御崎では一千六百九十四耗で、雨は少ない方であります。

一三、私たちの村(下)

風早の三穂と呼ばれて私たちの村は日高郡内でも最も早く開けたところで、今の日高平野あたりが未だ海であつた頃からこの邊にはもう人が住ひをしてゐました。地圖をあけてごらん下さい、日本海に面した出雲の大津に近く日御崎といふ岬角があり、その東に美保といふ地名があります。この事から考へてみれば、私たちの^出先は古く出雲方面から移住して來たらしく、傳統的に海に慣れ海に親しみ、遠く大洋上に乗出して活動發展する所の進取的氣象に富んでゐました。それで神功皇后の征羅の役にも勇敢なるこの地方の人たちが多く従軍し、その後も事ある毎にめざましい働きを

しました。そして昔から漁業に長じ航海に秀で「わしの兄さん御崎の沖で潮にもまれて鯉つる」などは朝飯前の事、關東九十九里濱の漁業開發は實に私たちの**畠**先によつてなされました。即ち數百年前から當地方の人々は東國方面に出動して幾多有利な漁業權を掌握し、また進歩した漁法をあの邊の人たちに傳へました。かういふ氣象は明治開國の機運に育まれてどしく、アメリカへアメリカへと志し、それが「連れもて行こらいく」と皆仲よく手を携へて参りました。そしてどこへ行つても念頭常に皇國を忘れず、郷里を忘れず、大に**畠**先を敬ひ、大に母校を愛して一生懸命にやるのが三尾人の長所であります。私たちもよくこの美風を見習ひ父祖の志を繼いで、よき日本人となり、皇國の榮と故郷の幸をはからねばなりません。



三尾といふ土地は古いが三尾村といふ村は明治二十二年四月に町村制といふ國法に基いて組織せられたもので、いはゆる自治團體であります。つまり御上の御世話にならいで自分たちの村は自分たちの協力によつてうまく治めて行かうといふ仕組なので、村長助役収入役の三役を選んで事務をとつて戴くと共に十二人の村會議員を選んでいろいろ相談に與つて戴くことになつてゐます。その三尾村長と

しては稲葉直十郎さんが明治二十二年から同四十二年まで

二十一ヶ年の長い間勤続せられ、次に千原英三さんが明治

四十三年から大正二年まで、小山申一郎さんが大正三年か

ら同六年まで、吉田富達さんが大正六年から大正十四年ま

で、増田隆**畠**さんが大正十四年から昭和四年まで、

田富達さんが再び昭和九年から御勤め下さつてゐます。その事務を執る所が即ち三尾村役場であります。

村には村役場の外、公共の機關として三尾郵便局(明治四十四年七月二十一日開局、今の局長は小

山久雄さん）三尾村巡查駐在所（明治三十四年四月十九日に創設）三尾信用組合（昭和二年一月十一日創設）日御崎燈臺（明治二十八年一月二十五日創立）等があります。

人々の交通及び物資の運輸といふことについては、昔は主として海路を利用し舟の便によつたために、陸上交通機關は最近まであまりに恵まれず、他町村に比してよほど見劣りがします。即ち東して和田松原から御坊に通ずる三尾街道も近年漸くあの崖道を改修して自動車が辛うじて通れる位に成りましたが比井崎村阿尾・産湯方面へは昔とあまりちがはぬ阪路を越えねばなりませんし日御崎へは勿論昔のままの羊腸たる山路を攀ち登る外はありません。自動車は南海自動車會社が近年御坊驛三尾間の定期運轉を行ひ、之を利用する人が非常に多くなります。それから三尾街道の改修以來自轉車乗用者がめつきり増加し現在村内の自轉車數一一三臺に達してゐます。將來御坊臨港鐵道が當方面へ延びて來るやうにでもなれば當村の交通の劃期的に至便になりますが、私も自身としても大に交通徳を重んじて事故を起さないやうに氣をつけると共に、協力してこの村の交通機關を更にますます改善するやうに努力せねばなりません。

一四、三尾村漁業株式會社

三尾村漁業株式會社は（大正十四年九月十日に創設されて、資本金二十萬圓拂込金十八萬圓）一株四十五圓四千株）と云ふ堂々たる會社で現代の社長は田中三吉氏であります。大正十五年二月八日出初式を擧げ、純米国式巾着網で日ノ岬を中心に操業した處本邦と米國との潮流關係や海底の變化の爲漁獲皆無であつたので縣水産課の紹介により仙臺、塩釜方面の漁業をなし全地方の巾着網を模倣したところ大に前途の曙光を認め、更に朝鮮方面の漁業をなし、仙臺式に朝鮮式巾着網を加味したので漁獲も多くなつて益々事業を擴張し、千葉、茨城、福島、宮城、魚津、朝鮮方面へも出漁し盛んに活躍しています。

一五、近村名所舊跡巡り

逢母——磯邊——本の脇

春の海日ねもすのたりくかなといふなごやかな趣もよいが、疾風起つて怒濤岩を噛み巨船を弄ぶこと木の葉の如きものすごい眺もまたなかくに戦闘的であり男性的であつて面白いです。それを磯邊のほとり三尾街道を歩きながら見るのもよいが、その上の山上から見下せば一層面白いです。

日高松原

和田村本脇から全村和田・松原村吉原・田井を経て濱瀬に至る長汀凡そ四千五百米、そこに幅五百米海拔十米内外の砂丘上に、巨人の長髯を思はせるような大保安林（いはゆる日高松原）があります。反別にして約百町歩。官地民木といつて土地は官地、樹は地方のもので、中には周一丈を超える老松もあり、吉原には南龍松とて並松（周七八尺）もあります。もとは大抵日高平野の住民たちが小苗を持寄つて潮風除に植込んだもの、日高平野万頃の沃田にとつては正に生命線であり、景觀としても紀伊半島無双の松原であります。

木の間もる夕日の光あかくと

日高松原冬に入るかな（田端憲之助）

西川

東内原村の奥鹿瀬山中から流れ出て西内原村を経、志賀川を併せ、和田・松原二村を経て日高川口に注ぐもので流程三里半ばかりあり、昔から水害で名高い川でしたが昭和八年から縣の事業として工費五十

む望を濱の樹煙りよ邊磯



三萬圓を投じて大改修工事を起し十一年九月に至つて出来上りました。工事区域は西川で五千三百米志賀川で千百米、使役人夫延人員二十萬人、川床擴張のため潰れた土地が約十二三町に及びました。實に日高郡では空前の大土工であります。

御坊町

本願寺御坊（日高別院）の門前町と日高川口の港街が発達してこの町が出来上りました。人口一萬四千六百餘、日高郡での政治・經濟・産業・教育・宗教等あらゆる方面の中心となつてゐます。

御坊驛

「松もないのに小松原、御坊にないのに御坊驛」と歌はれてゐますやうに、紀勢西線御坊驛は、名は御坊驛でも實は御坊町内ではなく、湯川村小松原にあつて御坊町へは、そこから臨港鐵道で連絡してゐるのです。あつ可笑しいなあ、あの驛の札にごぼうとありますがあれはごぼうでなければなりませぬ。

驛の北に仰ぐ山頂が湯川家の龜山城址で政春直光直春等の古英雄が、あそこで紀南三郡を睥睨したものですが、天正十三年（一五八五年）紀元二二四五年）豊臣勢の南征に抗し兼ねて落城しました。

驛の東南子安の森には湯川神言があり、木花咲耶姫を御祀りしてゐます。この境域も湯川氏全盛時代の延内で、今より木立も繁く壕も大きく、競馬場や両側の並木など立派なものでした。

かげ涼しなほ木高かれ小松原 宗 祇

宗祇は有田郡の出身で、湯川政春と連歌で近づきになり、かつてここへ遊びに来たことがあつたやうです。神言の北にある歌仙堂といふ地名はその名残を留めたものださうです。

道成寺（矢田村鐘巻）

だうじやうじ驛はなかく、馴みにくいでせう。驛から北に見る森の中に三重の塔のさがみえませう、あれが道成寺です。「此處から鐘巻十八町、六十二段の階を、上りつめたら仁王さん、左に唐金手水鉢、右に三階塔の堂」といふその塔です。いいでせう。

寺は文武天皇の大寶元年(七〇一年)（紀元一三六一年）勅願によつて紀道成が建て、皇城鎮護のため御本尊を北面して安置しまつたと傳へられてゐます。即ち後堂うしろだうの本尊ほんぞんです。寺には前堂の御本尊千手觀世音像せんじゆくわんぜおんをはいじめ十餘軀の佛像、本堂仁王門等の建物及び道成寺縁起繪卷えまき等の國寶があり、遠近から參詣する人が絶えません。境内三千五百餘坪、山號天音山は勅願云々の故事に因み、院號千手院は御本尊の靈佛に因んだものです。

晚鐘の旅僧追ひゆく枯野かな
言水おんずい

陽炎やその石段の六十二
塊亭くわいてい

松井大佐表忠碑

和佐驛下車、東南へ數町、開山光性寺くわうしやうじの裏山にあります。大佐名は清助、丹生村松瀬の出身で夙に軍籍に入り我が國の生命線としての滿蒙の調査と開發に貴い一生を捧げ遂に護國の鬼となられたのであります。

この山から見る南方千曳山の麓には陸奥宗光の父伊達千廣の詠

うごきなきわが君が代のためしには

千曳ちびきの山ぞひくべかりける

を彫りつけた歌碑が建てられてゐます。それを建てたのは丹生村江川の人瀬見善水よしをといふ幕末の偉人でした。

由良墜道

紀勢鐵道が通じてから墜道といふものが澤山に出來ましたが紀南地方での墜道のはじまりは、西内原村池田から由良村阿戸へ越える「由良洞」で、實に明治二十一年頃に出來たものです。

興国寺

さいゆら驛下車、すぐ大門址につきます。明治二十一年の暴風で倒れるまでは再興後の大門があり、關南第一禪林くわんなんだいぜんりんの額がかかつてゐたのですが、さびれたものです。四方の山は荒れるし、田畑は開かれ、人家は建ち並んで、昔の面影は殆ど見られません。

寺は、はじめ安貞元年（紀元一八八七年）高野の僧願性（實は關東武士葛山五郎景倫）がその故の主君源實朝を弔ふために建立し、鷲峰山西方寺と號し、眞言宗を奉じてゐました、その後三十年ほどたつて正嘉二年入宋僧覺心（法燈國師）を迎へて臨濟宗に改めました。

國師は信州松本の近くで御生れになり、夙に佛門に入つて奈良・高野・京都・鎌倉をはじめ各地を廻行されましたが、遂にえらい御師匠さんにめぐり會ふことが出来なかつたので、願性から學資の助けを得て四十三歳で入宋、四十八歳で歸朝されました。その間支那の名山靈區を尋ねて各地を遍參せられ、最後に杭州の靈洞山護國寺に無門和尚に謁し、そこで一ぺんに悟を開かれました。歸朝の後一旦高野に登つて禪定院の首座となられ、五十二歳のとき西方寺に入つて禪刹に改めると共に其の開山となられたのであります。

それから紀南地方にだんく臨濟宗が擴まり、國師の徳を慕うて方々から由良へ參るものが日に多くなりました。六十歳のとき、故郷にただ一人で居られるお母さんの身の上を案じ、わざく信州へ連れに歸つて手をひき後を押しつゝ熊野詣の案内を濟ませ、それから門前に庵をつくつて孝養をつくされました。翌年お母さんがなくなられてからは九十二歳の御臨終まで毎日ほだしで御墓參りを歛かしたことがなかつたといふほど親思ひであられました。

國師の御聲名が海内に高まると共に執權北條氏はぜひと關東へ請じようといろく手を尽くしました。そして或時鎌倉の壽福寺へと御勸めしましたが國師は固く辭退されました。皇室からもたびく御召を蒙り畏くも龜山上皇、後宇多天皇の御前で御説法申上げるといふ光榮を擔ひ、京極女院からは一針三禮の法衣を賜はるほど御帰依を忝うしました。そして永仁六年九十二歳でなくなりました。が、龜山法皇法燈禪師と賜ひ、後醍醐天皇は重ねて法燈圓明國師と諡し給ひ、後村上天皇興國元年（國師がなくなられて四十二年後）興國寺の號を賜はつたのであります。

その後世が亂れてから寺は大層衰へましたが、近世になつてやつと今のやうなお寺に建て直しました。境内一千三百餘坪、現住職堀雲巖師は當世稀に見る高僧であられます。

昭和十一年十二月一日印刷
昭和十一年十二月五日發行

著作兼
發行者

和歌山縣日高郡三尾村
崎山

勇

印刷所

和歌山縣和歌山市新堀四丁目
福本印刷所

印刷所

印刷者

和歌山縣和歌山市新堀四丁目
福本芳太郎

印刷者

發行所 和歌山縣日高郡三尾尋常高等小學校

あとがき

この「三尾郷土讀本」は和田尋常小学校の「郷土史讀本」と一緒に郷土史関係を集めた処に収められていなかったもので、今までこの本が発行されたことも、父が所蔵していたことも全然知らなかった。尋常高等小學校が発行した「読本」である通り、当時の付近の村で編集された「村史」・「村誌」とは一寸内容が異なっている。

また今観光案内などでは「海猫島」となっている島が「中出」になつていたり（然し日本水路誌でも国土地理院の電子地図でも蜚取島となっている）、「煙樹ヶ浜」が「日高松原」となっている。「煙樹ヶ浜」の名の由来は画家の近藤浩一郎氏が名付けの親だそうだ。同じ昭和^{（一九三六年）}十一年に発行の「郷土史讀本」（和田尋常高等小學校発行）では煙樹浜となっている。

平成二十三（二〇一一）年五月二十八日（土）

清水 章博